

信念の検証について

C.S.パースの認識批判再考

野 口 良 平

はじめに

この文章の目的は、19世紀末から20世紀初頭にかけて、米国の哲学者・記号論者、チャールズ・サンダース・パース（1839 - 1914）が定式化を試みつけた探求の理論が、人間と社会への新しい見方をきりひらく可能性を含む試みであったことを示唆することである。

パースの探求の理論は、唯一の、真なる“意見”や“信念”への到達を学の中心課題とみる見方への異議申し立てに発しながら、先行する諸言説、諸信念への“態度”の定立（＝理解と評価）を学の中心課題におく、新しい学のとらえ方への転回を企てたものにほかならない。しかし、その試みのもつ可能性と問題点は、パース自身にも原因があるにせよ、それにふさわしい仕方で検討されてきたとは言いがたいといえる。

もしわたしたちが、個々の信念の妥当性の理解と評価を試みようとするのであれば、諸信念間の差異や対立をいったんかっこに入れて（どの信念が正しいか、という問い方はやめて）、およそ信念一般がどのような条件のもとに成立しているのか、ということについてのふみこんだ理解が必要となる。人間には、どのような信念をも抱く権利があるが、同時に信念には信念としての普遍的な成立条件もある。その条件を理解することから、わたしたちは個々の信念の妥当性を検証する基準を手にすることができるのではないだろうか。

パースは、人間の探求の目的は信念（もしくは意見）の定立それ自体にほかならない、という作業仮説をおいたうえで、つぎのように述べている。

このような考え方は不十分であり、私たちが求めているのは単なる意見ではなく、真なる意見なのだ、という反論が寄せられるかもしれないが、実際に検討してみると、この反論には根拠がないことがわかる。なぜならば、私たち人間は、強い信念さえ手にすることができるならば、その真偽に関わらず、満足することができるという本性をもっているからである¹⁾。

信念にはそれが「信念である」という以上何の根拠も存在していない。ということは、たとえどんなに強固な信念であっても、その内実をみるならば、「習慣の束」のようなものにすぎない、ということでもある。信念対立、という事態をときほぐしていくためには、信念をいったん「習慣」の所産にまでひきもどして考え、どのような条件のもとにその習慣の違いが成立しているのか、あるいは、両者の間で共有可能な習慣とはいったいどのようなものなのか、と問うてみるのが可能である。たとえば、プロテスタント教徒とカトリック教徒の間のような教義をめぐる信念対立にしても、その対立が絶対的であるとみなす原理的な根拠は実は、何一つない、とみるのが妥当だからである。

どのような信念も習慣の所産にすぎないという主張は、別の場所において、「人間は記号を使わずに物を考えることができない」という「記号論」の主張として言い換えられることになる²⁾。

習慣とは、「赤信号だ、止まろう。」とか、「あの場所に近づくといやなことがおこりそうだ、避けよう。」というように、ある種の経験(=a)に対して人間において成立する約定的な(意志を媒介にして作られる)反応傾向(=b)のことであり、このとき、(a)(b)は「記号」としての関係をもつ、ということができる。そのように定義することができるならば、習慣が存在するかぎり、そこには必ず記号が成立しているということになる。

ところで、習慣が約定性をもつとは、それが人間の意志や欲望のあり方に応じて変えていくことのできるものである、ということである。習慣、あるいは習慣の変化は、およそ生命一般が存立するための必須の条件であるが、人間の場合は、習慣の成立条件についての理解自体を、言語によって確かめ合い、検討することができる。

信念は、習慣としてとりだして、他人とともに検証することができるものである、という直観が、パースの記号論の構想をうみだす根拠になることは、どんなに強調してもしすぎることはないように思われる。

1 パースの認識批判

パースの探求は、既存の信念の補強に終始して、問うべき問いを見失っている哲学や形而上学の現状への批判としてスタートしたものだだった。

パースが生きたのは、産業革命の進行と並行しながら、異なる感受性や価値観同士の相克葛藤が深刻化していた米国社会である。とくに、技術本位の世界像と、ピューリタニズムを基調とする宗教的な世界像の間に折り合いを見いだすことはきわめて困難であった。加えて、パースの青年期におこった南北戦争は、関係者にも死傷者を出す結果となる。技術的な世界像と宗教的世界像、先住民の世界像と新住民の世界像の間で生じる信念対立をどのようにみていくことができるのか。このような問いの発見が、パースの仕事の色合いを決めていくことになる³⁾。

数学者の父の影響もあり、もともとは数学や自然科学の分野で仕事をすすめていたが、大学を出た頃から哲学への関心が芽生え、独力でテキストを読みすすめるようになる。最初に親しんだのは、スピノザ、カント、パークリー、スコトゥスなどの著作だったと彼はのちに回想しているが⁴⁾、とくにカントの『純粋理性批判』に惹かれ、これに没頭する。人間の認識能力の限界についての議論が、正面から行われていたからである。

異なる主観同士の間で信念の一致が生じる条件を、どのような仕方でいいあてることができるか。これが、近代以降の哲学者たちに共有されていた基本的な問い(認識批判)だった。この問いを、主観の内部において信念が形成されていく条件を構想する、という方法で掘り進めていこうとしたのがカントである。パースが『純粋理性批判』からうけとったのは、認識批判のモチーフである。

パースの認識批判の構想は、「人間にあらかじめそなわっていると主張されてきた諸能力について疑問」(1868, 以下「能力」)、「四つの能力の否定がもたらす帰結について」(1868, 以下「帰結」)、「信念の固め方」(1877)、「概念を明晰にする方法」(1877)という、初期の代表的な論文群を通じて提示されている。これらの執筆を支えていたのは「形而上学クラブ」の若い仲間たちだったが、彼

らとの間に共有されていたのは、特定の教説や信念、信仰ではなく、むしろ、独断のひきおこす悲劇への自戒の念だった⁵⁾。以下、初期論文における展開をみていくことにする。

(1) 「信念の固め方」(“The Fixation of Belief”)

この論文は短いながらも、初期論文の中で主要な位置を占めるものであり、その信念が正しいかという問いをカッコにいれたうえで、信念それ自体が人間にとって存在理由をもつ事実⁶⁾に光をあてようとした試みである。

パースはまず、人間の根本状況が、「信念(belief)と疑念(doubt)の複合」として与えられている、という前提から出発する。信念と疑念の区分は、それ以外の全ての区分に先立って、誰もが知らず知らずのうちにやっているような根本的な区分に由来する。たとえば、次のような事態を想起してみると、この区分の根拠を思い描く助けになるだろう、という。

疑念は「問いが存在する」という状態を、信念は「問いが存在しない」という状態を示している。

疑念は「行為の実行にためらいを感じる」状態を、信念は「行為の実行を促す」状態を示している。

疑念は「欲望の対象の欠如した」状態を、信念は「欲望が満足されている」状態を示している。

疑念とはひとことでは、弱く、説得力をもたない信念である。人間は、誰でも強く、説得力のある信念に到達したいという本性をもっている。疑念から信念を作ろうとする努力が「探求(inquiry)」である。この努力は、個人史においても人類史においても、はじまりと終わりを特定することのできない、無限の過程であるといえる。

探求は、既存の習慣への固執ではなく、経験を通して疑念の対象となった既存の習慣を、未来に訪れうるさまざまな事態への予測をふまえて作り変えていく、習慣変化の努力である。その意味で探求は「自己制御(self-control)」の努力であるといっていよい。

探求は、普通「真理をめざすもの」と考えられている。しかしこれは、「信念をめざすもの」で十分である。むしろいかなる「真理」であれ、生活を実質的に支えているような信念(もしくは疑念)によってこれを験そうとするのが探求である。

信念定立の基準は、個人史においても人類史においても、経験の歩みに応じた変容過程を示す。この過程を、パースは次のような仮説的な構図によって描き出そうとする。

固執の方法(method of tenacity)

自己の願望のみを基準にして信念を定立する方法。この方法の長所は、自己の欲求に従って、きわめてすばやく、しかも容易に決断をくだすことができる、ということである。この方法は、私たちに確固不動たる信念とすばらしい平安を与えるが、自分が内属する共同体の意向と関係をもたざるをえないような状況に遭遇した場合には、堅持することが困難になる。

権威の方法(method of authority)

自分が内属する共同体の意向との一致を基準にするという方法。第一の方法にくらべると、適用

範囲は広がりましている。共同体の意向とは、親の意志、世間の思惑、教会の権威、首長の権力、国家の意志など、その共同体で公認されている正統的な信念体系を意味する。この方法に従うならば、当該の共同体において非公認であるとされる意見の存在自体が疑念の対象になるので、この方法を採用することの中には、公認されない意見の抑圧への加担が含まれることになる。この方法には、共同体の当面の存続に寄与するという有効性が存在することが知られているが、共同体の意向とくらべることが無意味であるような純個人的な問題の決定には無力である。またそれは、単一の共同体の意向のみを念頭におく方法なので、他の共同体との接触を余儀なくされた場合には効力を喪失する。

先天的方法 (method of a priori)

いかなる共同体に属していようと、同様に従うことが可能であると想定されるような精神の習慣、すなわち理性との一致を基準とする方法。その端的な実例は、形而上学の歴史にみることができる。この方法に従えば、経験的事実を考慮せずすませることができるので、自分の好みどおりに信念を作ることができる、という利点がある。しかし、形而上学的な欲求(好み)は実際のところ、事実左右される弱さをもつために、根拠としてはまだ不確かな面を残している。

科学の方法 (method of science)

事実との一致を基準にするということ。事実とは、各人の意見や信念のあり方に左右されず、しかも万人に等しく影響を与えるような存在である。事実の存在理由は、そのことへの参照を通して、感受性や価値観の異なる人間同士に共通了解の可能性を与えることである。ただし、この方法は、事実が各人に対してもつ意味や価値をカッコにいれて成り立っているため、そのことの代償を伴わずにはいない。

から の区分は、かつてオーギュスト・コントが人類の思考方法について、「神学的段階」から「形而上学的段階」「科学的段階」へしだいに進化をとげてきたという物語を描き出した(「実証精神論」)ことを連想させるが、パースの場合は、進化論的な物語の補強ではなく、信念の成立条件の重層性を思い描く手がかりである点で、コントの試みとは異なる方向性をもっているといえる。

(2)「概念を明晰にする方法」(“How to Make Our Ideas Clear”)

概念の存在理由とは、それが万人に通有の便宜をもたらす、ということである。概念の“意味”とは、便宜や欲望との相関性によってしか存在できないものである。概念の定義をめぐってひきおこされる対立の多くは、概念の意味の性質への無理解を背景としてもっている。概念明確化の一つのマニュアルとしてパースが提案するのが「プラグマティズムの格率」である。

ある対象についての概念を明確化しようとするならば、その対象が私たちの行動に対して実際どのような効果をおよぼしうるかを考えてみよう。そのとき、その効果について考えられたことは、その対象についての概念と一致するだろう⁶⁾。

たとえばもし「水」の概念を知ろうとするなら、その対象(=水)が人間の生活にとって、どの

ような価値をもってきたか、また今後もちうるのかと問い、思い描いてみるのが有効である。このパースの提案は、ことに数学や自然科学において用いられる概念が、個人や共同体間の意見、信念の違いをこえた共通理解可能性をもちえてきた事実に基づきものである。

この提案に対しては、ウィリアム・ジェームズのような同志からの修正案も出されていることをつけくわえておく必要がある⁷⁾。ジェームズは、パースの提案の有効性を認めた上で、一般的な概念が、個々の人間に対しては多様な意味やイメージを伴って現われる事実こそ注意をむけるべきであるという。この多様性こそは、人間的価値の源泉なのであって、概念の存在理由、といわれているものも、実はその中からしか現われてこないのではないだろうか。

ジェームズの指摘はきわめて重要であり、パースへの有効な批判となりえている。科学の方法の価値が、科学の方法によっては明らかにできないということが、カントを読んでいたにも関わらず、このときのパースには主要な関心事ではなかったことをこの批判は示しているといえるだろう。

2 世界と自分の接点

「新しいカテゴリー表 (“ On a New List of Categories ”)(1867) という論文において、パースは、信念の成立条件は、言語表現の一般形式を手がかりに探ることができるのではないか、という自らのアイディアの検討を試みている。

たとえば、

(1) AはBである。

という、最も単純な文章を目の前においてみることにする。この文章は、信念を言語表現におきかえる場合の一般形式であるといえる。この主語、繫辞(コブラ)、述語からなる単純な文章の成立条件は、カントの判断表(質、量、関係、様相)のような、検証不可能な仮説によってではなく、万人にとって検証・追体験の可能な経験領域からとりだすことができるはずである。

そこで(1)の文章構造をみていくと、それが、

(2) ある条件のもとでは、私(もしくは私たち)は、AをBとして見ることができるだろう。

という文章を省略した形であるという事態がうかびあがってくる。なぜならば、A、Bの結合関係は、世界のあり方それ自体に由来するというよりも、人間の意志や欲望に由来する選択と配列によって、はじめてもたらされているというべきだからである。換言すれば、認識は、所与の世界の模写や再現ではなく、諸観念、諸表象間の新しい結合 世界の再定義 を可能にすることなのである⁸⁾。

パースによれば、(2)の文章の成立には、三つの要因の関与をみることができる。主題的な対象はA(「関係項(relate)」)である。次には、Aのもつ可能性を照らしだす参照物として選択されたものである(「相関項(correlate)」)。最後に、A、Bの間に関係を作り出すこと(「表象(representation)」)を通して、新しいパースペクティブを獲得しようとする作用C(解釈項

(interpretant))がある。このA, B, Cを一つの複合体としてみると、それは従来「記号」の名でよばれてきたものと一致するだろう。

知覚判断が言語表現の形をとるのは、世界認識を他人と共有したいという意志の結果である。世界は、部分的事実として各人に現われる。それが事実であるとは、ある強制力として世界が経験されている、ということである。この強制力が苦しみの情緒を与えると、疑念が生じる。しかし、事実の世界には同時に、疑念から信念へという探求を支持する条件も潜在している。知覚判断が、有限な部分的事実と言及しつつ、別の何か(無限)を指示せずにはいないこと理由はそこにある。

この見方をさらに展開した論文が、「能力(“Questions Concerning Certain Faculties Claimed for Man”)」「帰結(“Some Consequences of Four Incapacities”)」である。

パースは述べる。言語表現におきかえることのできない認識(パースによる「直観」の定義)は、あるともいえるしなないとはいえる。これは論理的には確証しえない事柄である。ただ一つ言えるのは、認識が言語表現の形をもとめることには、それなりの根拠があるということである。その根拠をみてみたうえで、それでも直観主義の主張が成り立つかどうかを判断してみてもどうか。

直観主義への反論に際してパースが第一に注意をむけるのは、自己意識の成立条件である。

子供は、はじめのうちは「わたし」とは言わない。それがあるときとつぜん「わたし」(あるいは「ぼく」)などと言ったりする。おそらくそのことは、最初にはなかったはずの自己意識が、あるときなにかの契機とともに不意に生まれ、成長している、という事実を示している。

子供は最初、自分の身体の状態のみを、世界を知るための基準として用いている。おいしいものをたべると、世界はおいしい。面白い人があらわれると、世界は面白い。しかし、おそらくは言葉をおぼえるころから、子供は自分の身体を基準とするだけでは知ることのできない世界があるということを知るようになる。

子供が、「ストーブは熱い」と誰かが話しているのを耳にしたとする。はじめその子供は、「そんなことはない(だって知らないから)」と主張する。なぜなら、自分の身体がストーブに触れたことはなかったからである。ところが、実際に触れてみると、他人の証言は間違いではなかった(自分の主張も間違っていたということもできない。と同時に、事後の観点から見ればやはり訂正を要する)、ということを知ることになる。そこで子供は、「無知」とはどういうことなのかを理解すると同時に、その無知が帰属するところの自己、というものを想定することができるようになる。さらに、その誤りうるものとしての眼でもう一度まわりを観察してみると、他人達もやはり自分の“仲間”(人間)であることが見えてくる。

こうして子供は、一般的に妥当する判断以外に、一個人の身体にしか妥当しないような判断がある、ということに気づく。ここに誤りというものが登場する。そのことは、自己というものが、自らが誤りうるということへの自覚によってはじめて成立していることを物語っているのである⁹⁾。

パースはここで、きわめて重要なことを言っている。それまでの神学や形而上学では、人間の可謬性(fallibility)を、神(全知者)との対比において説明するケースがほとんどだった。有神論者で

あれ、無神論者であれ、基本的には「客観世界」の存在を前提にし、これを完全に認識できる存在とそうでない存在の二つにわけ、いわば完全認識の「欠如」として誤りを説明してきたといえる（ジョン・ロックのような例外を除く）。

しかしパースがここで与えている説明は、それらとは異なっている。彼によれば、可謬性は、万人との間で共有可能な判断と、自分個人にしか適用できない判断という、二つの異質な判断領域をかかえこみ、しかもその差異が不可避的に時間的ズレとして経験されることになるという、人間固有の条件の産物である。これが「可謬主義 (fallibilism)」の主張の最大の力点にほかならない。

この主張は、「真理 (truth)」の概念についての新しい見方をもたらすことになる。真理とは、神学者や形而上学者が思い描いてきたような、「客観世界」の完全な認識を導く根拠でもなければ、一部の特権的な人間にしか知られえないものでもない。それはむしろ、万人の間で妥当する判断と、自分個人にしか適用できない判断の相関関係の理解を導く根拠である。そしてそれは、「誤り」とはそもそも何なのか、という問いを可能にする根拠ともなるのである。

「実在 (the real)」という概念もまた、同様の観点から再定義されることになる。「実在」という概念が示しているのは、各人の特殊な事情によって異なるような事柄と、万人によって承認されうような事柄の違いの意味、というべきものである。

実在概念のこのような成立事情は、それが本質的に探求共同体 (COMMUNITY) の概念を含んでいることを示している。そしてこの共同体は、明確な境界をもつものではなく、新しい知見に対してつねに開かれているような、不定形の存在である¹⁰⁾。

さらに、「普遍 (universals)」という概念についても検討がくわえられることになる。

普遍とは、万人によって共有可能なものごとのあり方のことである。普遍的なものの実在をみとめない唯名論者の主張の中で重要なものは、いかなる人間も、個々の特殊な人間として以外は存在できない、ということであるが、彼らは暗黙裡のうちに、「人間」に不可知の実在としての特権的な地位を与えようとする。しかし「人間」は、それなりの理由があって精神が生み出した虚構であり、その実在性はあくまでも用法において示されるのだと考える方が理に適っている、という。

実在にも虚構にもそれぞれに固有の存在理由がある。そうみるならば、唯名論と実在論は矛盾せず、双方の主張を繰り込んだ、相互主観的なパースペクティブが成立可能である。実在と虚構の区分は、真理と誤謬の区分に対応するものであるが、そのどちらも、決して一方が一方を排斥して成立するようなものではありえないのである。

直観主義批判の根拠の第二にあげられるのは、すべての知覚判断は仮説形成である、というものである。

人間には、直接経験の流れを再現する能力が存在しない。かりに再現を試みたとしても、もとの経験とは別のものとなる¹¹⁾。経験は、一回性、固有性を核としていて、同じ経験は二度と訪れない。しかしながら、異なる経験を感受する精神状態相互の関係に注目してみれば、そこにはそれ以上の事柄がふくまれていることがわかる。それを可視的な形にもたらす媒介作用は、意識の背後にあるひとつの実在的な力 (a real effective force behind consciousness) によって担われる。知覚判断は、一つの思いつき、強引な力が関与することによってはじめて成立する。言い換えれば、いかなる知

覚判断も、仮説形成 (abduction) としての性格をもつのである¹²⁾。

この主張が示唆しているのは、仮説形成ということが人間にとってもつ存在理由である。仮説は、探求をよりよい方向に導くためにある。仮説の当否は、それ自体の真偽によるものではなく、探求の起動力になるかどうかではかられるべきである。もし探求をよい方向に導くためであれば、どんな仮説であってもそれが誤りであったとしてもそれは十分な存在理由をもっているといえる。

パースから離れて一例をあげると、このことを端的に示すのが、精神分析における仮説のあり方である。精神分析の目的は、患者にとっての治癒過程を励磁することである。精神分析は、エディプス・コンプレックス仮説に例をみるように、さまざまな仮説を構想し、用意するが、それらの存在理由は、患者がその仮説をうけいれることで、治癒しうる、ということである。この場合、仮説の真偽は問題ではない。どんなにでたらめな仮説でも、治癒を可能にするのであれば、その限りにおいて根拠をもつことになる。逆に、どんなに一般性の高い仮説であっても、当人の役に立たないのだとしたら、当然それはナンセンスであるとみなされるべきだろう。

3 最高基準としての美

パースの初期論文は、信念の存在理由と成立条件の解明をめざしたものであったが、一方で、理論上の難点を内包するものでもあった。それは、事物についての信念と、価値についての信念の相関関係を明確にすることができなかつたことである。

パースは信念を、いったん習慣の束として考え、習慣の定立もしくは変化それ自体を、探求の“目的”として定義した。信念を習慣の束としてみる、という見方には重要な存在理由がある。しかし、信念と習慣を同一物とみることはできない。習慣は、宇宙や生命一般に認めることのできるような属性であるのに対し、信念は、あくまでも人間固有のものであるからである。人間の探求と、宇宙や生命一般の運動との差異は、いかにして言いあてることができるか。パースがたどりつくことになったのは、「人間は、探求の目的自体を問わずにはいられない存在である」という解答である。このアイディアは、パースの仕事に転機を与えることになる。

数学の問題は、一定の形式に従って答えを探ることができるようにできている。「メキシコの政治はどうなっているのか」のような経験的な問題も、どうすれば探求が可能になるかは容易に知ることができる。しかし、「探求の目的とは何か」という問いについては、同じようにはいかない。それは、その解法がはじめの一步から探られる必要のあるような、未成の問いだからである。

この問いは、パースが出発点において精読した、カントの『純粋理性批判』を支えるモチーフでもある。

『純粋理性批判』(1781)の基本的な主張は、事実についての問い(=世界についての問い)と、事実の見方についての問い(=人間についての問い)は、厳密に区分されるべきである、ということである¹³⁾。

カントによれば、従来の哲学(形而上学)が考えてきた問題は、次の4つである。

- 世界の起源と限界についての問い
- 物質の分割根拠についての問い

自由と自然的因果律の関係についての問い
 神の存在についての問い

しかしこれらの問いは、そもそも人間の理性の限界をこえる問いであり、答えを探すこと自体が不可能である。無理に答えを出そうとしても、ああもいえる、こうもいえる、としか言いようがない。形而上学の問いがこのような二律背反の形をとることをさして、彼は「純粹理性のアンチノミー」とよぶ。

このような形而上学の問いは、もともとは客観世界（世界の本質）を理解することへの欲求から生じたものである。しかし、人間には、そもそも客観世界を認識する能力がない。人間にできるのは、世界がみずからの感官に現われ出る仕方（＝現象世界）を把握することができるだけである。客観世界を認識できるものがあるとすれば、それは神だけである。神のみに認識できる客観世界（「真」「善」「美」のような世界の本質）を、カントは〈物自体〉とよぶ。

人間の理性は、〈物自体〉を認識することはできないが、同時に不完全なものから完全なものを思い描かずにはいられないような本性をもっている。そこで、つぎのような役割分担が想定されることになる。

現象世界の法則や構造の認識。

経験科学（悟性）が分担。

〈物自体〉を意欲し、思い描くこと。

「世界（宇宙）」とは何か、「私」とは何か、神とは何か、という三つの問いへの応答であり、理性が分担。

これに対し、「〈物自体〉の存在をどうして確かめることができるのか」という批判が寄せられることもある。たとえば、パース自身も「カント主義者は、〈物自体〉といった認識不可能なものが存在するという自らの主張を批判し、そういった主張をきれいさっぱり捨て去るべきである」と述べ、〈物自体〉を検証不可能なフィクションであるとして認めなかったが¹⁴⁾、これは明らかなミスリーディングである。

カントの〈物自体〉の眼目は、閉ざされた状況に拘束されている（有限）と感じている人間が、それゆえにこそ、状況の外側（無限）を思い描かずにはいられない、という条件の中に信念検証の根拠をおきなおそうとする点にある。たしかにそれは、検証不可能なフィクションではあるが、カントであれば当然、そのようなフィクションを仮構しうることこそが人間の自由の証しなのだ、反論するだろう¹⁵⁾。事実パースも、探求の目的とは何か、という問いにぶつかり、これと格闘する中で、カントと似たような理路をたどるに至っているのである。

パースはこの問いに対し、つぎのように接近を試みる¹⁶⁾。

古くから、探求の究極目的を表現するために用いられてきた言葉は「美」である。この言葉は同時に、人間の仕事の妥当性を検証する最高基準を意味し、人間同士がお互いを称賛する際の根拠とされてきたものでもあった。それは「美」が、人間が世界との関係において織り成していく幻想性を核として成立し、人間の欲望が動物とは違い、このような幻想にむけられていることを物語るものだろう。

探求の目的は何か。美しいとはどういうことか。醜いとはどういうことか。万人が思慮をめぐらしたすえに称賛するものは何か。パースによれば、これらの問いはみな同じことを意味している。この問いに答えようとする努力をさして、彼は「美学」とよぶ。

善いとはなにか。悪いとはなにか。人間にとって、行うべきことと行うべきでないことの区別は何を根拠に生じるのか。この問いに答えようとする努力が「倫理学」である。しかしこれは、探求の究極目的に照らさない限り、答えの探せない問題である。したがって、倫理学は美学に従う。

妥当な推論とそうでない推論の区別は何か。この問いに答えようとする努力は「論理学」である。これは、美学が扱うよりも、倫理学が扱うよりも、さらに狭い経験領域にのみ関わっている。したがって、以上二つに従うものである。

これらの価値、美醜、善悪、真偽のような価値は、どのような成立根拠をもち、どのように重なり合っているのか。このような問いを扱う領域をパースは「規範学 (normative science)」とよび、そこで明らかにされるべきものは、あらゆる学や信念の存在理由を検証する究極の根拠 最高基準としての「美」の理念 であるとする。

パースにおける「規範学」への開眼は、ちょうど夢野久作の小説『ドクラ・マグラ』が、犯人＝探偵という構図を描き出すことで、探偵と犯人の役割分担を前提にしていた従来の推理小説の枠をふみやぶった事実を連想させるものである¹⁷⁾。

この規範学の主張は、二つの重要なポイントをもっている。

一つは、美の再定義ということである。

美は、内的直観によってのみ経験されうるものである、という従来の前提に対してパースは、万人の探求にとって共有されうる目的、人間関係の原理として再定義しようとする。それは、およそ信念の妥当性が検証に付される際の、最強、最深の根拠としての意味をもつ。

このモチーフはおそらく、カントが『判断力批判』の中で「趣味判断のアンチノミー (二律背反)」を指摘するモチーフとも重なり合うものである。

カントによれば、何かに対して「美しい」という判断を人間が与えるとき、自らの判断がまったくひとりよがりのものだとは信じていないはずであるという。人間が何かを美しい、と感じる経験の中には、暗黙のうちに、それが私にとってというのみならず、他人にとっても美しく感じられるはずのものである、という信憑が繰り込まれているのではないだろうか。

カントとパースは、何が美しいか、という問いは、美しいとはそもそもどういうことか、という問いに答える能力がすべての人間にそなわっている、という理解を前提にして成立している、と考える。そして、この問いが原理上、万人が共有できる普遍的な問いであることに、重要な意味を認めようとするのである。

もう一つは、

水は (触ると) 冷たい。

という種類の判断 (認識判断) の示す普遍性と、

水は美しい。

という種類の判断（価値判断）の示す普遍性を区別したことである。

前者の場合、その妥当性は、事物の一般的な利用可能性を参照するだけで、検証・追体験される可能性をもつのに対し、後者の場合は、誰が、どんな条件のもとで発語したのかという、個別的なコンテキストや状況についての理解がなければ、その「意味」を知ることができず、その妥当性を検証するすべをもちえないのである。

前者と後者が混同されるところから、さまざまな言語上の（人間に固有の）問題が生じることになる。もし両者の区分を徹底しようとするならば、両者間の根拠関係を、「前者が後者によって支えられている」という、人間に固有の条件として明らかにしていく必要があるだろう。

規範学の主張は、認識判断と価値判断の相関関係をいかにして解き明かすか、という課題の必要性に、パース自身が思いをよせていたことを示している。この課題をパースが徹底的に遂行していたというわけではないが、ジェイムズによって指摘をうけた「プラグマティズムの格率」の限界を、彼自身が自覚しようとしてつとめていたことだけは確かである¹⁸⁾。

おわりに

この文章で述べてきたのは、日本では、記号論の嚆矢、あるいはプラグマティズムの提唱者として知られることの多かったパースの探求が、信念検証の根拠を思い描く努力の一つにほかならなかった、ということである。そのことは、初期の認識批判から規範学の構想へ、という理路においてよく示されている、というのが、ここで行われている基本的な主張である。

同時に、パースの試みは、いくつかの重要な問いをあとにのこすものでもあった。

第一に、その探求の理論において、事実への問いと事実の見方への問いの区分、というカントのモチーフをうけつぎながら、両者の相関関係（根拠関係）の解明、という課題が十分には遂行されていないことである。そのことは、物と心、身体と意識、のような二項対立を、一種の理神論的なロジックによって解こうとする彼の構え（「現象学」¹⁹⁾）において端的に示されている。決定論と自由意志、政治と文学、制度と反制度のような二項対立は、両者を俯瞰する第三のメタ的な観点の設定によっては解くことができず、あくまでも二元論的世界構成が、いったいその人間のどのような条件によって成立しているのか、という問い方をこそ要求するはずである。

第二に、探求の理論の補助的な系をなす記号論において、記号と言語の区分が不徹底におわったことである。文学作品の享受が、信号の読み取りとは異なる経験であるように、記号は、やはり言語ではない。そのことは、人間以外の動物と人間がおかれている条件の違い、あるいは意味と価値の違い、との連関において説明される必要があるだろう。パースの記号論は、アイコン（記号と対象の類似性を用いて作られる記号）、インデックス（記号と対象の因果性を用いて作られる記号）、シンボル（任意に約定によって作られる記号）の三つ組として提示されているが、その用語法に従うならば、彼において未着手なのは、アイコン、インデックス、シンボルの根拠関係、および記号や言語の本性の解明、という課題であるといえる。記号と言語の区分、というパースがしのこした課題は、人間と社会に関わる学にとって、きわめて重要な意味をもつものであると思われる。

注

- 1) 「信念の固め方」, 『世界の名著 59』(以下『名著』), p.61。
- 2) 「人間にあらかじめ備わっていると主張されてきた諸能力についての疑問」, 『名著』, pp.103-127。
- 3) 南北戦争が、初期のパーズに与えた影響を推測する手がかりは、プラグマティズムの運動の同志だったウィリアム・ジェームズの二人の弟が従軍して廃人になったこと、小オリヴァー・ウェンデル・ホウムズが前線で三度傷を負った経験をもとに、法の杓子定規な適用を正当化するスコラ的な法学とは違う、経験法学を切り開いたことである。鶴見俊輔『アメリカ哲学』(pp.471-474)。
- 4) 「プラグマティズムとは何か」(1905)、『名著』, p.231。
- 5) 「形而上学クラブ」は、1870年代のはじめに米国のマサチューセッツ州ケンブリッジにおいて、二週間おきに開かれていた若い学徒の集まりに出発する。メンバーの書齋を会合の場所にして、食事はきわめて質素だったという。
- 6) 「概念を明晰にする方法」, 『名著』, p.89。
- 7) ジェームズのプラグマティズムがパーズとそれと異なるのは、個別的・一回的な知覚体験に重大な意味を認めていた点である。両者の違いについては、『プラグマティズム』をみよ。
- 8) ここでいわれているのは、20世紀に入ってから論理実証主義者たちが夢想したような、世界のあり方を忠実に再現する単純知覚命題の存在の否定である。パーズは、いかなる知覚判断もそれを行う人間の思いつき、仮説形成(アブダクション)としての性格を帯びざるをえない、と主張する。この点については後述。
- 9) 「能力」, 『名著』 p.115。
- 10) 「能力」, 『名著』 p.163。
- 11) ここでパーズが述べていることは、F・ソシュールが「シニフィアンとシニフィエの恣意性」として述べた原則と対応関係をなしている。
- 12) 「能力」, 『名著』 p.147
- 13) 『純粹理性批判』(篠田英雄訳, 岩波文庫, 上巻)
- 14) 「プラグマティズムの問題点」(1905)、『名著』 p.262。
- 15) この点に関して人類学者のC・レヴィ＝ストロースは、箱庭、ミニカー、壇の中の船、のように、実物より小さなものがなぜ人を惹きつけるのか、と問い、そこから「縮減模型」という興味深い考え方を提示している。「現寸大の物ないし人間を認識しようという場合とは逆に、縮減模型では全体の認識が部分の認識に先立つ。それは幻想かもしれないが、そうだとすると、知性や感性に喜びを与えるその幻想を作り出し維持することがこの手法の存在理由である。」、『野生の思考』 p.30。
- 16) 『著作集 1』, pp. 189-193。
- 17) 記号学者・U.エーコとT.A.シービオクの編集した『三人の記号 デュパン/ホームズ/パーズ』(小池滋監訳, 東京図書, 1990年)という論集は、パーズの記号論と推理小説の構造的類似性を照らし出す、という興味深い意図に発しているが、推理とは推理の目的を推理することである、というパーズの「規範学」の着想はとりあげられず、探偵と犯人の不一致ということを暗黙の前提においている。
- 18) パーズは後期において、プラグマティズムの格率の適用範囲が限界をもつものであるという見解を述べている。「プラグマティズムというのは、すべての観念の意味ではなくて、私が知的概念とよぶもの、つまり客観的事実に関する論証がその構造に関わるものであるような概念の意味だけをつきとめる方法である。・・・それは、情緒の性質に関わるものではない。」、『著作集 2』, p.177。
- 19) 彼自身の命名で、人間の意識に現われる事象のあり方を第一性、第二性、第三性の三つに区分する。現象学の創始者であるフッサールの影響からではなく、むしろ中期以降のパーズがよく読んでいたヘーゲルの『精神現象学』からの影響なのではないかと、研究者の米盛祐二は推測している。『パーズ著作集 1』(勁草書房), 訳者あとがき, による。

参考文献

* 著者別，アルファベット順

- 有馬道子 『パースの思想；記号論と認知言語学』 岩波書店，2001年
- BERNSTEIN, R.J.(ed.), *Perspectives on Peirce, Critical Essays on Charles Sanders Peirce*, New Haven and London, Yale University Press, 1965 (岡田雅勝訳 『パースの世界』 木鐸社，1978年)
- DAVIS, W.H., *PEIRCE's Epistemology*, The Hague, Martinus Nijhoff, 1972 (赤木昭夫訳 『パースの認識論』 産業図書，1990年)
- ECO, U., *A Theory of Semiotics*, Bloomington, Indiana University Press, 1976 (池上嘉彦訳 『記号論I・II』, 岩波現代新書，1980年)
- ECO, U., SEBEOK, T.A., *The Sign of Three - Dupin, Holmes, Peirce*, Bloomington, Indiana University Press, 1983 (小池滋ほか訳 『三人の記号 デュパン，ホームズ，パース』 東京図書，1990年)
- JAMES, W., *Pragmatism* (榊田啓三郎訳 『プラグマティズム』 岩波文庫，1957年)
- KANT, I., *Kritik der reinen Vernunft* (篠田英雄訳 『純粹理性批判』 岩波文庫，1961 - 1962年)
- KANT, I., *Kritik der Urteilskraft* (篠田英雄訳 『判断力批判』 岩波文庫，1964年)
- LÉVI-STRAUSS, C., *La pensée sauvage*, Paris, Plon, 1962 (大橋保夫訳 『野生の思考』 みすず書房，1976年)
- LOCKE, J., *An Essay Concerning Human Understanding*, 1690 (加藤卯一郎訳 『人間悟性論 上・下』 岩波文庫1940年)
- MORRIS, C.W., "Foundations of the Theory of Signs," *Foundations of the Unity of Science*, Vol.1, University of Chicago Press, 1938, "Esthetics and the Theory of Signs," *Journal of Unified Science* 8, 1939 (内田種臣・小林昭世訳 『記号理論の基礎』 勁草書房，1988年)
- 丸山圭三郎 『ソシュールの思想』 岩波書店，1981年
- 丸山圭三郎 『ソシュールを読む』 岩波書店，1983年
- PEIRCE, C.S., Cohen, M.R. (ed.), *Chance, Love, and Logic*, New York, George Braziller, 1956 (浅輪幸夫訳 『偶然・愛・論理』 三一書房，1982年)
- PEIRCE, C.S., HARTSHORNE, C. & Weiss, P. (ed), *Collected Papers of Charles Sanders Peirce (I, V, VI)*, Cambridge, Mass., Harvard University Press, 1935
- PEIRCE, C.S., the Peirce Edition Project (ed.), *The Essential PEIRCE - Selected Philosophical Writings vol.1-2*, Bloomington and Indianapolis, Indiana University Press, 1998
- PEIRCE, C.S., Kenneth Laine Ketner(ed.) *Reasoning and the Logic of Things : The Cambridge Conferences of 1898*, Harvard University Press, 1992 (伊藤邦武訳 『連続性の哲学』 岩波文庫，2001年)
- パース, C.S., 遠藤弘編訳 『パース著作集1 現象学』, 『パース著作集2 記号学』, 『パース著作集3 形而上学』 勁草書房，1985 - 86年
- プラトン, 水池宗明訳 「クラテュロス」 『プラトン全集2 クラテュロス テアイテトス』 岩波書店，1974年
- SAUSSURE, F. de, Bally, C. et Sechehaye, A.(ed), *Cours de linguistique Générale*, Lausanne et Paris, Payot, 1916 (小林英夫訳 『一般言語学講義』 岩波書店，1972年)
- 鶴見俊輔 「アメリカ哲学」 『鶴見俊輔集1』 筑摩書房，1991年
- 上山春平編 『世界の名著59 パース・ジェイムズ・デュエイ』 中央公論社，1980年
- 上山春平 「プラグマティズムの哲学」 『世界の名著59 パース・ジェイムズ・デュエイ』 中央公論社，1980年

(本学大学院博士後期課程)